

Regarding Wu Changshuo's Birthplace and His "Wu-yuan"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松村, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6546

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



呉昌碩の生誕地と「蕪園」をめぐる

松 村 茂 樹

【キーワード】 呉昌碩、生誕地、呉応奎、読書楼故宇、蕪園

はじめに

「中国最後の文人」と称される呉昌碩(一八四四―一九二七)の生涯については、多くの研究が存在するが、その生誕地については、説が定まっていない。また、呉昌碩が青年時代を過ごした「蕪園」についても、呉昌碩帰業の地として語られるばかりで、そこに移居した目的はよくわかっていない。

本稿では、このような状況のもと、名門・遷浙呉氏に属す呉昌碩の科挙受験という観点から、生誕地を定め、実は「蕪園」も同じ地点であったという大胆な仮説を、实地踏査も交えて提示したい。このことにより、文人としての呉昌碩の原点を確認することができるだろう。

一、呉昌碩の生誕地について

呉昌碩の四男・呉東邁(一八八六―一九六三)は、その著『呉昌碩』(一九六三)、一二 上海人民美術出版社 邦訳に足立豊訳『呉昌碩(人

呉昌碩の生誕地と「蕪園」をめぐる

と芸術』一九七四、七、二〇二 亥社がある)の中で、呉昌碩は、清道光二十四年(一八四四)八月一日生於浙江省安吉県鄣呉村一個讀書人家。

〔清の道光二十四年(一八四四)八月一日、浙江省安吉県鄣呉村の一讀書人の家に生まれた。〕

とあり、呉東邁の長男・呉長艱(一九二〇―二〇〇九)の編になる「呉昌碩先生年譜」(呉長艱著 河内利治・北川博邦訳『わが祖父呉昌碩』一九一〇、三、二〇 東方書店 所収)もこれを踏襲し、安吉県鄣呉村を生誕地とする。ただ、呉昌碩の次男である呉咸龕(一八七六―一九二七)の次男・呉瑤華(一九〇九―一九八六)は、「重印缶廬集跋」(呉昌碩『缶廬集』一九八四、七 文海出版社 所収)の冒頭で、先大父呉公昌碩府君、民国前六十八年甲辰(公元一八四四年、道光二十四年)夏曆八月初一日、生於浙江省旧湖属安吉県東街読書楼故宇。

〔先大父呉公昌碩府君は、民国前六十八年甲辰(西曆一八四四年、道光二十四年)の旧曆八月初一日、浙江省旧湖属安吉県東街の読書楼故宇(旧居)に生まれた。〕

と記しており、安吉県城東街を生誕地とする。

吳瑤華の長男・吳民先（一九四〇—）は、「古缶盧鈞撫四則」『名家翰墨』第三十七号 一九九三、二、一 翰墨軒 初出 吳民先「缶盧拾遺及其他」二〇一三、一二 中国發展出版社 所収）の中で、吳瑤華の記述を根拠に、安吉県東街生誕説を提唱し、鄞吳村の吳昌碩故居にも疑問を呈している。そして、丁羲元『現代名家翰墨叢書（卷一）・吳昌碩』（二〇〇五、一 西泠印社出版社）は、これを支持し、従来の兩説併記を訂正したいとしている。ところが、匡得鰲『安吉吳昌碩』（二〇〇七、二 中国文化出版社）は、吳民先・丁羲元説に反駁し、鄞吳村生誕説を唱え、鄞吳村吳昌碩故居も疑いの余地がないとする。

それぞれの論拠の詳細は、ここでは繰り返さないが、各書が論及していない点を挙げて筆者の説としたい。それは、吳瑤華が、「読書楼故宇（旧居）に生まれた」と述べている点である。「読書楼」は学問所、勉強棟という意味なので、当時、吳昌碩の祖父・吳淵（一七七八—一八五七、原名は応保）が山長（院長）をしていた安吉の古桃書院が想定されるが、前出吳民先「古缶盧鈞撫四則」は、

安吉県城（今安城鎮）規模甚小、東街在迎春門即東門内、古桃書院在宝成門即西門内。

〔安吉県城（今の安城鎮）の規模はとても小さく、東街は迎春門すなわち東門の内であり、古桃書院は宝成門すなわち西門の内にある。〕

と述べ、古桃書院の可能性を否定している。吳民先は、吳淵の最初の妻・章氏の実家が東街にあったことから、これとの関係の可能性を示唆しているが、筆者は、別の可能性を提示したい。つまり、「読書楼故宇」の「故宇」とは「旧居」の意味であるから、「読書楼」を固有名詞と考え、吳昌碩の従祖・吳応奎（生卒年未詳、室名は読書楼）の旧居と想定するのである。

吳応奎について、清の同治十三年（一八七四）年九月刻の汪榮修張行字纂『安吉県志』卷十六「芸文志下」は、以下のように記している。

吳応奎、字衡皋、孝豊諸生。案衡皋籍雖孝豊、然吳氏考試向來安孝相錯、至嘉慶以後則尽考安吉矣。故劉志列入選舉且収其詩。今當遵旧。

〔吳応奎、字は衡皋、孝豊の諸生。思うに衡皋の籍は孝豊であるが、吳氏は科挙の受験は従來安吉・孝豊まちまちで、清の嘉慶年間（二七九六—一八二〇）以後は全て安吉で受けるようになった。だから前の劉蘭敏修『安吉県志』は選舉志に列入してその詩も収めているのである。今はそれに従っておく。〕

つまり、吳応奎の籍は当時鄞吳村が属していた孝豊県であったが、科挙の試験は安吉で受けていたのである。当時の科挙受験者は、県城などの街に住み込んで受験勉強するのが普通であったから、吳応奎も安吉県城に勉強棟つまり読書楼を持っていたのであろう。吳応奎は、諸生（秀才）で終わっており、郷試に及第できず、安吉梅溪に移ったが、梅溪での室名そのまま「読書楼」としたと思われる。

吳昌碩は、この従祖を敬愛し、太平天国の乱の際に失われたその詩集『読書樓詩集』を捜し出して復刻し、乙卯（一九一五）年六月、自ら跋文を書いており、その冒頭で、

衡皋先生、於倉碩為大父行、倉碩兒時已不及見。

〔衡皋先生（吳応奎）は、倉碩（吳昌碩の別字）の大父行（祖父の世代）であり、倉碩が子供の時にはすでにお目にかかれなかった。〕と述べている。

吳昌碩が生まれた一八四四年当時、吳昌碩の父・吳辛甲（一八二一—一八六八）も安吉県城で受験勉強に勤しんでいたらしい。清の光緒三（一八七七）年刊行の劉濬修 潘宅仁纂『孝豊県志』（一九七五 成文出版社有限公司）卷六「選舉志・科目」「舉人」に、以下のようにある。

吳辛甲、同景沂科。同知銜、候選知県。鄞吳村人、籍安吉。

〔吳辛甲、前出の王景沂と同じく咸豊辛亥（一八五一）科に及第。

同知（知州の補佐官）職、候選（候補）知県。鄞吳村の人、籍は安吉。〕

つまり、呉辛甲は一八五一年に挙人となっており、郷試の前の県試や府試の準備も考えると、呉昌碩が誕生した一八四四年の頃は、まだ受験勉強の最中と思われ、安吉県城に住んでいたと考えるのが自然である。ちなみに、これは「選挙志」の記述であり、「鄣呉村の人、籍は安吉」とあるのは、科挙受験のための籍である。呉辛甲の父で、嘉慶戊午（一七九八）年に挙人となった呉淵の項も同じく「鄣呉村の人、籍は安吉」と記されており、前出『安吉県志』巻十六「芸文志下」のいう「清の嘉慶年間以後は全て安吉で受けるようになった」という記述を裏付けている。

さすれば、呉昌碩の従祖・呉応奎、祖父・呉淵、父・呉辛甲は、いずれも科挙受験のために安吉県城にいた時期があったということになる。そして呉辛甲は、安吉県城での受験勉強のため、呉応奎の「読書樓故宇」に住んでおり、そこで呉昌碩は生まれたのではあるまいか。

ただ、『呉氏宗譜』『呉氏列祖諸伝』（朱関田編著『呉昌碩年譜長編』二〇一四、八浙江古籍出版社の引用による）に見える呉辛甲の伝に、如川公諱辛甲、字周史、咸豊辛亥挙人、再試礼部不售。時粵匪竄踞江寧、公以世乱親老、遂不復出。

〔如川公は諱を辛甲といい、字は周史、咸豊辛亥の挙人で、更に会試に応じたが受からなかった。時に太平天国が江寧（南京）に占拠し、公は世が乱れ年老いた親を置いておけないとして、再び出仕することはなかった。〕

とあり、呉辛甲は、咸豊辛亥（一八五一）に挙人になった後、おそらく翌年の会試つまり咸豊二年壬子恩科に応じて受からず、科挙生活に終わりを告げて、鄣呉村に帰ったのであろう。前出の呉長艱編「呉昌碩先生年譜」「一八五三（咸豊三年、癸丑）十歳」の項に見える、

この年より、隣村の学塾に通って読書した。家からは遠かったが、風雨の日も休むことなく、学習にはげんでおこたらなかった。

という記述は、この年より、父と共に鄣呉村に帰った呉昌碩が、呉氏の故郷で本格的な学習を始めたことを意味すると思われる。そして、

呉昌碩の生誕地と「蕪園」をめぐる

注意すべきは、当時の鄣呉村には、読書人の子弟が通う学塾さえなかったことで、まして県試や郷試に応じようとする士は、安吉県城に住みこまねば受験勉強などできなかったたのである。

二、呉応奎「読書樓」の所在地

前章で述べたように、筆者は、呉昌碩の生誕地を安吉県城の呉応奎「読書樓故宇」であったと考えている。ただ、これを論証するには、呉応奎「読書樓」が安吉県城にあったことを指摘しなければならぬ。筆者は、その方法として、前出の呉応奎『読書樓詩集』に収められている詩から、「読書樓」の場所を特定しようと考えた。『読書樓詩集』は稀覯本であるが、幸いなことに全巻複印本を入手できた。

所収の詩を、順を追って見て行くと、詩題に「読書樓」が含まれる詩に幾つか出会う。まず、「卷之二」に、「暮春雜題読書樓五首」詩、「読書樓宴座用永嘉齋中讀書韻」詩が見え、「読書樓」で受験勉強をする呉応奎の思いが詠じられているが、場所は特定できない。だが、「卷之三」に、「桃州六絶句」詩があり、その第一首は次のようなものである。

春城百雉古桃州、桑葉陰濃暗道周。

老屋三間書百本、著余無事此勾留。

〔春色の中にある城壁が百雉の長さにもなる古桃州、桑の葉の陰は濃く道端は暗い。老屋三間に書物が百本、書くこと以外することもなくここに留まっている。〕

第一句に見える「古桃州」は、安吉の古名で、唐の積皎然「桃花石枕歌送安吉康丞」詩序に、「安吉、古桃州也」とある。「春城」とあるのは、安吉県城であることがわかる。そして、第三句に見える「書百本」がある「老屋三間」こそが「読書樓」なのであろう。

そして、明の嘉慶三（一七九八）年、郷試に及第できなかった呉応

奎は、「読書楼」を去ることになる。「卷之四」に、「題読書樓壁」詩があり、その冒頭の二句に、

郎当老屋北山前、彈指移家三十年。

〔落ちぶれた老屋は北山の前にあり、移家してからあつたという間の三十年であった。〕

とあり、「読書楼」で三十年を過ごしたことがわかる。

ちなみに、この時の郷試で、従兄に当たたる呉昌碩の祖父・呉淵は及第して举人となり、海塩県教諭を経て、前述のように、安吉県城の古桃書院で山長（院長）を務めた。つまり、呉応奎が安吉県城を去った後、その「読書楼故宇」を安吉県城に残った呉淵の息子の呉辛甲つまり呉昌碩の父がまた科挙の受験勉強のために使い、その間に呉昌碩が「読書楼故宇」で生まれたと考えれば、最も整合性があるのではないか。

三、呉昌碩「蕪園」も同じ場所

前述のように、呉昌碩は、呉応奎の『読書樓詩集』を捜し出して復刻し、跋文も書いている。呉昌碩は、他にも、明の呉維岳『天目山齋歲編』、明の呉稼澄『玄蓋副草』を復刻しているが、この呉維岳、呉稼澄父子は、呉氏を代表する文学者とも言え、その詩集を復刻するのは、成功した後裔の務めとして違和感のないものである。だが、呉応奎は、この二人に比べると、見劣りのする存在と言わざるを得ない。

では、どうして、呉昌碩は、この会ったこともない従祖をこれほどまでに尊ぶのであろうか。それは、やはりこの従祖の「読書樓故宇」で生まれ、そして、その後、ここに住んだからではないのか。つまり、筆者は、この「読書樓故宇」こそが、呉昌碩が最も思い入れを込め、帰巢の地とした「蕪園」でもあったと考えるのである。

「蕪園」について、前出の呉長艸編「呉昌碩先生年譜」一八六五（同治四年乙丑）二十二歳の項に、以下のようにある。

この年、父が継室楊氏（安吉曉墅の人）を娶り、一家は安吉城内の桃花渡畔に遷り住んだ。先生の居る所の小楼は僅かに膝を容れるほどであったが、これに題名して「篆雲楼」といった。家屋の前の園を「蕪園」と名づけた。

前述のように、呉昌碩は、十歳の頃に鄞呉村に帰ったが、鄞呉村が太平天国の乱に巻き込まれ、肉親の多くを亡くし、父・呉辛甲と二人だけになってしまふ。そして、ここにあるように、二十二歳の時、父と共に「安吉城内の桃花渡畔」の「蕪園」にやってくるのである。呉昌碩は、この「蕪園」に梅樹を手植えするなどしてこよなく愛し、「蕪園図自題」詩、「別蕪園」詩、「蕪園夢中作」詩、「福児書報蕪園近景、編成三絶句、寄令読之」詩などで、この地に対する思い入れを述べ、いつかは帰るべき帰巢の地としている。

だから、呉昌碩の愛好者や研究者は、呉昌碩がこの地に卜居したよいうなイメージを持っているが、ここに来て来た主体は父の呉辛甲であり、呉昌碩は父に連れられて来たと考えるべきであろう。では、呉辛甲は、何のために息子を連れて安吉県城にやって来たのか。それは、自らの父も、そして自らもして来たように、息子の呉昌碩に科挙の受験勉強をさせるために違いない。さすれば、自らもそうだったように、「読書樓故宇」にやって来るのが最も良い。また、呉辛甲にとって、「読書樓故宇」以外のところにわざわざやって来る必要性はないのではないか。

四、「蕪園」址を訪ねる

「蕪園」のその後について、前出呉長艸編「呉昌碩先生年譜」は、惜しむらくは、「篆雲楼」も「蕪園」も、ともに抗日戦争中に兵燹に燬かれ、遺址にはただ界石一塊があるだけである。

と述べており、当時の面影はないことが窺える。ただ、筆者は、現地踏査をしたいという思いを以前から抱いていた。そんな中、前出呉民



安城（旧安吉城）東門（旧迎春門）址



東門から西門（旧宝成門）に
続くメインストリート

先『缶廬拾遺及其他』に、「蕪園故址」という詳細な資料が掲載された。付せられた呉民先氏の題跋によると、一九八四年、呉昌碩生誕一四〇周年の際、安城（旧安吉城）の「張氏後人」が、記念座談会でこの油印図を発表されたという。そこには、「蕪園」の地点が、「原安吉鼎桃城鎮永凝坊二十七号、址為安城鎮東街大衆飯店店房」と記されている。二〇一七年八月二十六日、筆者は、「安城鎮東街大衆飯店」をめざして、安城に向かった。

「大衆飯店」は確かにあったが、そこは城外であった。そこで、中におられた方に聞いてみると、「大衆飯店」は以前、城内の「東街」にあったが、そこは「鳳琴賓館」という名前にして、弟に経営を任せ、城外のこの地に新しく「大衆飯店」を建てたとのことで、「鳳琴賓館」の場所を教えてくださいました。



鳳琴賓館（蕪園址）

呉昌碩の生誕地と「蕪園」をめぐって



旧安吉城呉昌碩故居と古埧

「鳳琴賓館」に行ってみた。ここが「蕪園」址であることは間違いない。ただ、中におられた方は、当時のことは何もご存知ないようだった。「鳳琴賓館」に向かって右側に路地があり、そこを入れて行くと、家屋があり、塀の上に古埧が置かれていた。そこをご主人・呉水清氏にお伺いしてみると、ここが呉昌碩の故居だったところで、この古埧は以前、ここにあったものを置いているとのこと、また、この辺りは、以前、四角い石畳で敷き詰められており、今もそのいくつかを残しているとのこと、出して来てくださり、お見せくださった。呉水清氏は、紹興からこちらに移って来られたというが、もとは郭呉村の呉氏であるという。郭呉村の呉氏は、太平天国の乱、そして日本軍の侵攻によって、様々な地方に散じており、自分もそうであったが、今は、呉昌碩の故居に住むことができ嬉しく思っていると話くださった。



燕園址（推定）

とあり、そこは、位置的にも、状況的にも合致している。そしてこは、安吉县城の「東街」であり、「読書楼故宇」も「東街」にあつたのは前述の通りである。

その路地をさらに進むと、雑草が生えた空き地があつたが、これが「燕園」であつたのであろうか。吳昌碩に詩法を授けた同郷の友人・施浴升の「燕園記」に、

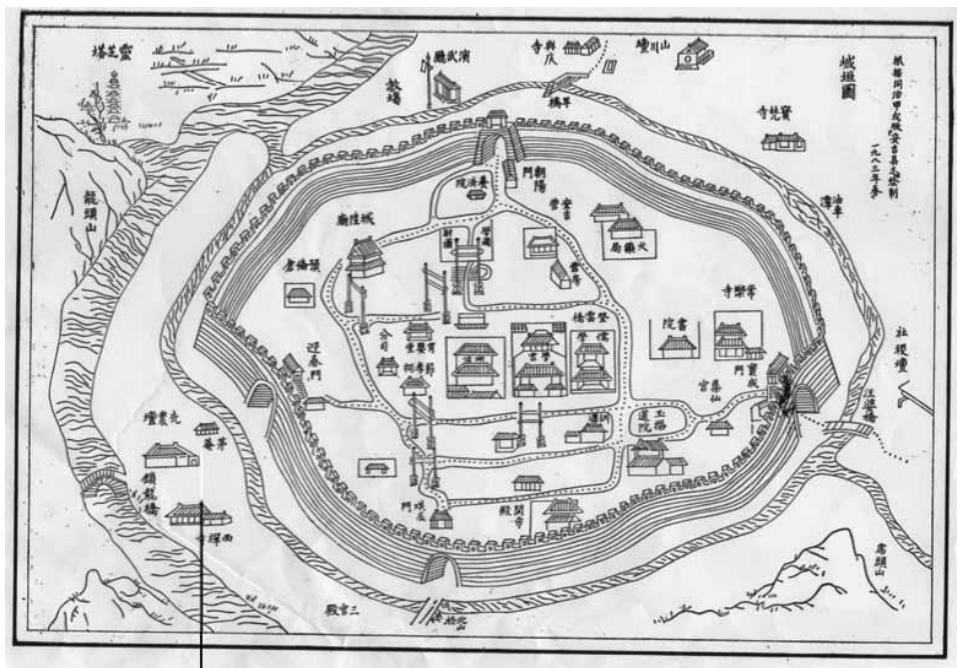
居安吉之東北偏、有曠地數畝、辟以為園、名之燕園。
〔安吉の東北の隅に、荒地が數畝あり、開いて園とし、燕園と名付けた。〕



旧安吉县城吳昌碩故居に敷かれていた石畳の一つ



旧安吉县城吳昌碩故居にお住いの吳水清氏（左）と筆者（右）



旧安吉县城地圖

五、「古桃書院」址を訪ねる



安城中学（正門）



安城中学（東南から見る）



安城中心幼兒園（正門）



安城中心幼兒園（北から見る）

ここに掲げたのは、清の同治甲戌（一八七四）版『安吉県志』によつて一九八三年に描かれた安吉県城の地図（安吉県地名委員会編『安吉県地名志』一九八四、一〇所収）である。当時の地図は上が南、下が北、右が西、左が東になっている。「読書樓故宇」「蕪園」があった「東街」は、東門である「迎春門」に近い地点にある。そして前述のように、呉昌碩の祖父・呉淵が山長をしていた古桃書院は、西門である宝成門の近くにあり、地図にも「書院」と記されている。

そして、この地図が載せられている『安吉県地名志』の「安吉県事業単位」に「安吉県安城郷中心小学」の項があり、以下のような記述がある。

歴史上曾称「古桃書院」、磬山書院。清光緒末、芸術大師呉昌碩曾任院長（今称校長）。

〔歴史上、曾て「古桃書院」、「磬山書院」と称されていた。清の光緒末、芸術大師の呉昌碩が、曾て院長（今の校長）を務めていた。〕
なんと、呉昌碩も、祖父が院長を務めていた古桃書院（呉昌碩の当時は磬山書院）で院長をしていたというのである。『安吉県人民政府日

P』「安城中学」によると、清の乾隆八（一七四三）年、安吉知州の劉薊植が州西に古桃書院を創建し、感豊十一（一八六一）年、戦火に毀られた。同治十（一八七一）年、安吉知県の金其相が重建し、磬山書院と改名したという。おそらくは、呉昌碩の父・呉辛甲も、呉昌碩を連れて「蕪園」に来た際、ここで院長をしていたのであろう。

さすれば、「安吉県安城郷中心小学」に行けば、そこが「古桃書院」「磬山書院」ということになる。同日、筆者はこの地点に向かうべく、まず地元の方に、小学校の場所を聞いた。すると、小学校は、今は城外に移っており、今の「安城中学」の場所に、以前小学校があったとのことであった。

ただ、今の「安城中学」の場所は、安吉県城の中心部であり、上掲地図では「儒学」とある地点に当たると思われる。地図にある「書院」はその西南にあるようだ。そこで、脇道に入り、その方向に進んで行くと、「安城中心幼兒園」があった。この地点なら、地図とも符合する。そこで、すぐ近くの民家を訪ね、この幼稚園が建っている場所の由来を聞いたところ、ここは、今の「安城中学」の場所にあった小学

校の敷地で、教職員宿舍などがあったと教えてくださった。つまり、「安城中心幼児園」の場所も、「安吉県安城郷中心小学」の一部であったのである。

整理すると、今の「安城中学」の場所も、「安城中心幼児園」の場所も、以前の「安吉県安城郷中心小学」の敷地であり、呉昌碩の当時は、「安城中学」の場所に「儒学」があり、「安城中心幼児園」の場所に、「古桃書院」改め「磬山書院」があったのであろう。

おわりに

呉昌碩には、故郷が二つあると言わねばならない。一つは、呉昌碩が属する名門・遷浙呉氏の故郷・鄞呉村である。そして、今一つは、生誕地であり、青春時代を過ごした安城つまり安吉県城である。呉昌碩がなぜ安吉県城で生まれ、青年時代にまた来ることになったのか。それは、父と自らの科挙受験のためであった。

呉昌碩は書画篆刻家として成功しているので、科挙受験に積極的ではなかった側面のみが強調されがちであるが、清末の混乱期とはいえ、当時は、読書人の家に生まれれば、科挙の受験は当然のことであり、故郷に受験勉強の環境がなければ、県城に出て行くのも、また当然のことであった。

かくして、呉昌碩は安吉県城を第二の故郷とし、科挙受験のための籍である「安吉」を冠し、「安吉呉昌碩」と署名した（前述のように、当時、鄞呉村は孝豊県に属していた）。今回、この呉昌碩にとって、重要な場所である安吉県城の現地踏査が叶い、「読書楼故宇」つまり「蕪園」、「古桃書院」改め「磬山書院」の旧址を確認し得たことは大きな収穫であった。

本稿は、平成二十九年科学費補助金（基盤研究C）「近代ポストン美術館における日中米文化交流」（研究代表者 松村茂樹 課題番号 17K02648）及び、大妻女子大学戦略的個人研究費「呉昌碩と日本人士」（課題番号 S2844）による研究成果の一部である。